

ミニスポーツ教室
- 貧困層の子どもたちに -
一橋大学 岡本ゼミ B 班

○ 田中 涼太郎 菅野 将志 廣井 花歌

1. 緒言

(1) はじめに

近年我が国では、貧困という言葉がスケールの大きい社会問題として広く知れ渡っている。中でも子どもの注 1) 相対的貧困率は上昇傾向にあり、2012 年では 16.3% に及ぶ。

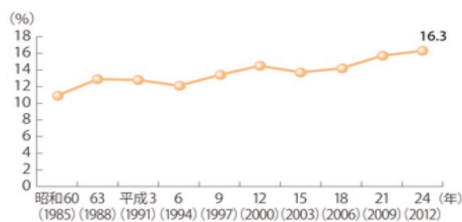


図 1 子どもの相対的貧困率

出典：内閣府平成 27 年版子ども・若者白書

(出典) 厚生労働省「国民生活基礎調査」

「子どもの貧困」は、注 2) 「子どもが経済的困窮の状態におかれ、発達の諸段階におけるさまざまな機会が奪われた結果、人生全体に影響をもたらすほどの深刻な不利を負ってしまうこと」とされ、人間形成において重要な子ども期の貧困は、子ども期だけでなく将来をも脅かす。それに加えて、子ども期の貧困が大人になっても解消されず、次世代の子どもまでもが継続して貧困状態におかれるといった貧困のサイクルが実際に生じている。

勿論、我が国では現に子ども食堂やプレーパークをはじめとした取り組みを行っており、子どもをきっかけに貧困家庭と社会をつなぐ場を提供してはいるが、そういった居場所に赴くことができない子どもたちが後を絶たないのも事実だ。

これらを踏まえた上で、我々はまず日本での貧困層に向けた取り組みを調査し、それらの問題点を念頭に子どもたちが貧困状態から抜け出すための居場所へ向かう契機づくりを施策として提言し、貧困のサイクルの縮小を目指す。

(2) 定義付け

上記の「子どもの貧困」の定義から、本研究を行うにあたり以下の言葉を次のように定義する。

ア. 「貧困」：経済的困窮の状態の中で諸段階において様々な機会が奪われ、通常経験することが経験できず、情報・生きる術・社会性を持っていない状態。

イ. 「居場所」：他人と関わりを持ち、そこで様々な情報を得ることによって社会性・生きる術を学んでいける場。例) 子ども食堂、プレーパーク

2. 研究の方法・結果

(1) 文献調査

①目的：子ども食堂に来た子どもたちはどう貧困から脱却するかの検証

データ元：NPO 法人豊島子ども WAKUWAKU ネットワーク(2016)『子ども食堂を作ろう！』明石書店

②得られた知見：

- ・ 子ども食堂は「支援の入り口」のイメージであり、子ども食堂を通じて他の支援制度・支援機関に繋がることで、様々な側面から貧困脱却の手がかりを掴める

例)「NPO 法人豊島子ども WAKUWAKU ネットワーク」では、子ども食堂のスタッフと信頼関係を持った子が勉強の悩みを打ち明け学習支援事業に繋がった事例もある

③考察：なんらかの方法で子ども食堂へ行くことができれば、子どもは食事支援のみならず、その後、様々な側面からの支援も期待でき、貧困脱却へと道は開ける。

(2) インタビュー調査

A. 千葉県船橋市コミュニティカフェ凜童舎（子ども食堂）

①訪問時期：6月21日(水)

②目的：子ども食堂の課題点の把握

③得られた知見：貧困層は口コミ以外の方法で情報が届かず、届いていても「自分のことについて根掘り葉掘り聞かれるのではないか…」といった恥やプライドなどの感情により来られない子どもがいる

④考察：子ども食堂は、情報がないため行くきっかけが得られない子どもや、情報はあるが恥を抱える子どもに来てもらうことが困難

B. 府中市子ども家庭支援センター『たち』

①訪問時期：7月11日(火)

②目的：市が行う貧困対策の実態の把握

③得られた知見

- ・ 情報を得られない子どもを外に出すきっかけは基本的に行政職員によって作り出されるが、こういった子どもの全体数は把握が難しい

- ・ 貧困層の子どもは近い将来のモデルとなる大学生に憧れを持つ

- ・ 高校からは義務教育ではないため貧困状態の子どもは進学しないことも多く、その場合、貧困状態にある子どもたちを把握することはさらに難しくなる

④考察

- ・ 情報自体を得られない子どもを居場所に赴かせることは困難

- ・ 大学生を利用したきっかけ作りは有効

- ・ 把握が難しくなる中学卒業までに、貧困層の子に子ども食堂などへ向かわせたい

C. NPO法人青少年の居場所 Kiitos

①訪問時期：7月18日(水)

②目的：貧困状態にある子どもの実態調査

③得られた知見

- ・子どもと継続的に向き合うことが重要
- ・イベントなどでスポーツを楽しむ子どもがいる
- ・しかし、エネルギーのない子どもは外に出る元気すらなく、情報や居場所に行くきっかけを得ることが困難

④考察

- ・継続性やスポーツは子どもを活気づける要素となりうる
- ・エネルギーのない子どもは情報やきっかけを得にくい

(3) 調査のまとめ

子ども食堂そのものでの主な支援は食事支援であるが、そこでは信頼関係を築く中で社会性や情報を提供する教育支援などの機能も果たしている。このような居場所に貧困状況の子どもが赴くことができていないことが分かった。また、中学卒業と同時に貧困層の子供の把握が難しくなることから、それまでの段階すなわち小・中学生に対して何らかの支援ができると望ましい。

また、上述したインタビュー調査より、貧困層の子どもは3つのタイプに分類される
ア. 外に出るエネルギーがあり情報や居場所に行くきっかけが得られ、実際に居場所に行っている子ども

イ. エネルギーがあり情報や居場所に行くきっかけは得られるものの、恥やプライドなどの感情が足かせとなり居場所に行けていない子ども

ウ. エネルギーがなく、情報や居場所に行くきっかけを得にくい子ども

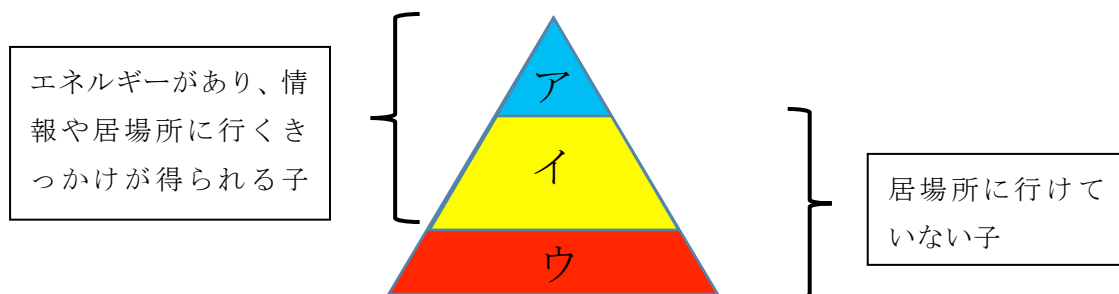


図2 貧困層の子どもの分類

まず、ウの子どもについては行政の働きかけなくして子どもを外に出させることは困難であることが判明した。よって、我々はイの子どもを対象に、居場所に行くきっかけ作りの施策を考える。

3. 提言

(1) 提言概要

提言先：市などの自治体

対象：小・中学生…中学卒業で貧困状態の子の把握が困難になる前に支援の手を伸ばす

開催場所：市のスポーツ施設…市内の平日の稼働率が低いスポーツ施設を利用する。事前予約が必要な場所は、予め予約をする。

運営：市の職員、大学生ボランティア…主催側の市の職員のほか、子どもにとって近い将来のモデルとなる大学生をボランティアとして募る。

開催時間・頻度：放課後、週に一回…子どもと向き合うために必要な継続性を保つこと、子どもが安心するまでに時間がかかるので協力者をある程度固定し子どもと信頼関係を築きやすくすることを考慮した。

内容…ミニスポーツ教室を開催して、その後子ども食堂へ行き食事を共にする。

(2) 期待される効果

スポーツをきっかけにすることで、子どもの恥やプライドといった感情が沸きにくくなる。また、大学生が中心となって運営することにより積極的に子どもが参加するようになる。スポーツ教室に参加した子どもが子ども食堂に行くきっかけを得ることで、子ども食堂という居場所の存在を知る。それらの結果、子ども食堂に行く機会が増えて貧困状況から脱することができる。

4. まとめ

ミニスポーツ教室をきっかけに子ども食堂に行くような仕組み作りをすることで、居場所に参加できていない子どもが参加しやすくなるだろう。今回の政策提言より、貧困のサイクルから一人でも多くの子どもが抜け出せるようになることを期待したい。

注1) 所得分布の中央値の 50%に位置する人々の割合 『子どもの貧困ハンドブック』
p.35 より引用

注2) 北海道大学大学院教育学研究院教授 松本伊智朗『子どもの貧困ハンドブック』p.12
より引用

<参考文献>

NPO 法人豊島子ども WAKUWAKU ネットワーク(2016) 『子ども食堂をつくろう!』

市民セクター政策機構 (2016) 季刊社会運動 『深刻化する子どもの貧困 子ども食堂を作ろう!』

松本伊智朗 湯澤直美 平湯真人 山野良一 中嶋哲彦(2016)『子どもの貧困ハンドブック』

